風と共に遺産が舞い込んだオーケストラ

――クラシック音楽とメディアの逸話

青山学院大学　名誉教授
佐久間 章行

東京フィルのゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。今回は、長年クラシック音楽に親しみ、パートナー会員として東京フィルをご支援くださっている青山学院大学名誉教授の佐久間章行様に登場いただきます。クラシック音楽の熱心な愛好家として、また芸術文化活動を支える支援者として音楽シーンを見つめてきた佐久間様。米国アトランタ赴任中に体験した、とあるエピソードを語ってくださいました。

1971年に米国ジョージア州アトランタ市にあるジョージア工科大学に客員助教授として赴任していた時のことである。

ある朝アトランタ・ジャーナル紙の朝刊を見て驚いた。なんと1面トップの大見出しに「アトランタ・シンフォニーの指揮者ロバート・ショウが辞意を表明」と載っている。アトランタ・ジャーナル紙は「風と共に去りぬ」の著者マーガレット・ミッチェル女史も勤めていた代表的な地方紙であり、通常の1面トップは、政治・経済・社会システム関連のニュースと決まっていた。

ご自宅のオーディオルームは音響設計をヤマハ（株）に依頼したという本格的なもの。「クリムトの絵画『音楽Ⅱ』を眺めつつ、B&W社の800Diamondの音を聴いています」と佐久間様

ロバート・ショウ（Robert Shaw）は、1948年にロバート・ショウ合唱団を設立して全米屈指の合唱団に育てた指揮者であり、1967年にアトランタ・シンフォニーの音楽監督に就任すると併設の合唱団を組織するなど活発に活動していた。

米国赴任中の思い出のお写真は全米50州を走破した愛車ギャラクシーとともに。
「クラシック音楽専門のラジオ局が遠くなり電波が途絶えると、次の都市のクラシック専門局の電波が待ち遠しくなりました」

次の日もアトランタ・ジャーナル紙は1面トップに「名指揮者ロバート・ショウをアトランタに引き留めよう」と載せた、その後も毎日のようにロバート・ショウ関連の記事が1面を飾った。

ロバート・ショウが辞意を抱いた最大の原因は、理事会との対立にあった。理事会はオーケストラの財務内容重視であり、支援者数の増加を最重点事項として設定し、演奏会のプログラムも有名な馴染みのある名曲ばかりを要求していた。一方、指揮者とオーケストラのメンバーは、さらに多様な選曲を望んだのである。

アトランタ・ジャーナル紙のこのような騒ぎは一ヶ月ほど継続した。すると、さる大富豪の未亡人が「ロバート・ショウを引き留めに役立つなら」と巨額な夫の遺産をポンと寄付したのである。問題は急転直下に解決した。ロバート・ショウは1988年までアトランタ・シンフォニーに留まり、シンフォニーを立派に育て上げた。さらに黒人霊歌の合唱曲の分野にも大きく貢献した。

この話を音楽三田会（※音楽関係に従事する慶應義塾出身または関係者による親睦会）の月例会で、ダークダックスのメンバーの一人である喜早哲（きそうてつ）さんにワイングラスを片手に披露したところ「そりゃあーそうですよ、ヨーロッパでは古（いにしえ）より、そのようになっていますよ」と当然のように捉えていた。

佐久間章行（さくま・あきゆき）
1935年東京生まれ、1960年慶應義塾大学院修了、同年管理工学科・助手。工学博士。1965年青山学院大学経営工学科講師～名誉教授。1971年ジョージア工科大学IE学科・客員助教授。日本経営工学会長。「人類存続主義」の提唱者、「AI次世代文明」の研究者、著書：「人類の滅亡と文明の崩壊の回避」「高度技術社会のパースペクティブ」（丸善プラネット）